

中国語の「一…也」+否定表現」について

小 川 郁 夫

1. 序
2. 従来のとらえ方と問題点
2. 1. 賓語提前
2. 2. 「主述述語文」
2. 3. 刘月华等1983
2. 4. 陆俭明1986
3. 「一…也」+否定表現
3. 1. “一…”について
3. 2. “一…”の「主語」飛び越え
3. 3. “一点儿”について
3. 4. “也”と“都”
4. まとめ

1. 序

現代中国語において、次の〔1〕〔2〕は同じ類型に属する文とされている。どちらの文も「極端さ」を表している。

〔1〕 什么也不知道。(何も知らない)

〔2〕 一句话也不说。(ひと言も話さない)

しかし、〔1〕と〔2〕の文法的性質上の明らかな相違として、〔1〕の肯定形は成立するが、〔2〕の肯定形は成立しないという点が挙げられる。

〔1〕 什么都⁹⁹知道。(何でも知っている)

〔2〕 *一句话都说⁹⁹。

この原因については、次のように考えられる。〔1〕〔1〕'の“什么”は疑問詞の非疑問用法なので、〔1〕のように「何も〔…ない〕」というマイナス方向の「極端さ」も表し得るし、〔1〕'のように「何でも」というプラス方向の「極端さ」も表し得る。それに対して〔2〕の“一〔句话〕”は「1つ〔の言葉〕」という少ない数量を意味する語なので「1つも〔…ない〕」というマイナス方向の「極端さ」しか表し得ないのである。

〔1〕〔2〕はマイナス方向の「極端さ」、即ち全面的な否定を表す文であると言える。本稿ではこれらの文のうち、〔2〕のように数詞“一”を用いる文「一…也」+否定表現」の文法的諸問題について考察する。

2. 従来のとらえ方と問題点

序で「極端さ」という語を用いたが、例文〔1〕〔1〕'〔2〕の“什么”や“一”に認められる性質を、中国で発行されている文法書は概ね“周遍性”と呼んでいる⁹⁹。そしてこれら“周遍性”を持つ語を含んだ文について、従来、賓語提前ととらえるものと、いわゆる「主述述語文」ととらえるものの2通りが行われてきた。以下では、これら従来のとらえ方を概観しながら、その問題点について検討する。

2. 1. 賓語提前

賓語提前ととらえる文法書は、次のような例を挙げ、“一句话”“一口水”“一个字”はそれぞれ動詞“说”“喝”“认得”のもともとの賓語であり、それが提前されたのだとする。

〔3〕 一句话也没说。(ひと言も話していない)

〔4〕 一口水也没喝。(ひと口の水も飲んでいない)

〔5〕 一个字也不认得。(ひとつの字も知らない)

例えば胡裕树1981では、

在动宾语组中，动词在前，宾语在后，次序也是固定的。在一定条件下，动宾谓语句中的宾语也可以出现在动词的前边。「動詞＋賓語」フレーズにおいては、動詞は前、賓語は後にあり、語順も固定的である。しかし、ある一定の条件のもとでは「動詞＋賓語」述語文の中の賓語が動詞の前に現れることもある

と述べ、「一定の条件」の1つとして、

宾语前边有“一”，后边有表示否定的副词“不”或“没、没有”，构成“一……不（没有）”的格式。（賓語の前に“一”を伴い、後に否定を表す副詞“不”や“没、没有”を伴い、“一……不（没有）”の文型を構成する場合）

を挙げ、さらにこの文型の特徴を“周遍性”にあるとしている⁽⁴⁾。

確かに〔3〕〔4〕〔5〕における“一……”は本来は後ろにある動詞の賓語である。

〔3〕' 说一句话（ひと言話す）

〔4〕' 喝一口水（ひと口の水を飲む）

〔5〕' 认得一个字（ひとつの字を知っている）

しかし、胡の説明では、これらの文と同じ類型に属する次のような文を処理できない。

〔6〕 一个人也不去。(ひとりの人も行かない)

〔7〕 一本书也没意思。(1冊の本もおもしろくない)

〔6〕〔7〕はどちらも“一……不（没）”の形になっており、“周遍性”を備えているが、“一个人”“一本书”は“〔不〕去”“没意思”の賓語ではない。これらは「主格の語」である⁽⁴⁾。

実際には、“一……不（没）”の“一……”は本来は賓語でも「主格の語」でもよいのである。従って次例〔8〕は、例えば〔8〕'〔8〕”のような多義性を持つ。

〔8〕 一个人也不认识。(ひとりの人も知らない)

〔8〕' 〔私は〕ひとりの人〔を〕も知らない。

〔8〕" ひとりの人も〔私を〕知らない。

〔8〕の“一个人”がもともと“〔不〕认识”の賓語である場合には〔8〕は〔8〕'のような意味になるし、「主格の語」である場合には〔8〕は〔8〕"のような意味になる。

このことから、「……也」+否定表現の“……”を賓語提前ととらえることは妥当ではないことが分かる。

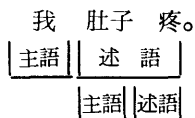
2. 2. 「主述述語文」

いわゆる「主述述語文」とは、述語の部分「主語+述語」で構成されている文を指す¹⁰⁾。次の〔9〕〔10〕は多くの文法書が「主述述語文」と見なす典型的な例である。

〔9〕 我肚子疼。(私はおなかが痛い)

〔10〕 他工作忙。(彼は仕事が忙しい)

これらの文は一般に次のように分析される。(〔9〕だけを例示する)

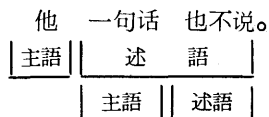


そして、“我”“他”を「大主語」，“肚子”“工作”を「小主語」と呼んだりする。

徐枢1985では、

〔11〕 他一句话也不说。(彼はひと言も話さない)

という文を、上例〔9〕〔10〕と同様に、



と分析する⁷⁾。つまり、同書では“一句话”を「小主語」と見なし、〔11〕を「主述述語文」と考えているのである。

しかし、〔9〕〔10〕のような典型的な「主述述語文」と、〔11〕のような文の間には違いがないのであろうか。

典型的な「主述述語文」の「大主語」と「小主語」の間には領属関係が存在する。つまり〔9〕〔10〕の“我”“他”は“我的肚子”（私のおなか）“他的工作”（彼の仕事）と表せることから分かるようにもともとは属格なのである。しかし、これは〔9〕〔10〕が、

〔9〕’ 我的肚子疼。（私のおなかは痛い）

〔10〕’ 他的工作忙。（彼の仕事は忙しい）

と同義だと言っているのではない。〔9〕〔10〕は、もともと属格であった語が「主題化」されて「主語」（主題の語）となった文と考えられる。

ところが〔11〕の“他”と“一句话”の間にはこのような領属関係はない。

〔11〕’ *他的一句话也不说。

また、〔11〕は“一句话”を文頭に出して、

〔11〕” 一句话他也不说。（ひと言も彼は話さない）

としても自然な表現として成立するが、〔9〕〔10〕ではよほど特殊なコンテキストを設定しない限り不可能である。

〔9〕” *肚子我疼。

〔10〕” *工作他忙。

〔11〕を「主述述語文」ととらえる文法書には、〔11〕”も「主述述語文」として次のように分析するものがある⁸⁾。

一句话 他 也不说。

主語	述語
----	----

主語	述語
----	----

しかし、〔11〕と〔11〕”はどちらも“他”について述べた文であり、「主語」（主題の語）は“他”である⁹⁾。上記の分析法は、文頭にある語を「大主語」、それに続く部分を「大述語」とし、「大述語」の前半部分を「小主語」、後

半部分を「小述語」としているだけで、余りに形式的であると言わざるを得ない。

2. 3. 刘月华等1983

上に述べた「賓語提前」説と「主述述語文」説の折衷案とも言えるものに刘月华、潘文娛、故粹1983がある。

〔12〕 我上海去过，广州没去过。(私は上海には行ったことがあるが、
広州には行ったことがない)

〔13〕 他这也不吃，那也不吃。(彼はこれも食べないし、あれも食べ
ない)

〔14〕 他谁都不认识。(彼は誰も知らない)

〔15〕 这次听写，他一个字也没写错。(今回のディクテーションで、
彼はひとつの字も書き間違えなかった)

刘等は〔12〕の“上海”“广州”，〔13〕の“这”“那”，〔14〕の“谁”，〔15〕の“〔一个〕字”を前置賓語と呼び、次のように説明する⁹⁹。

前置賓語は有限的。只有句中出現施事、而且句中的受事又緊接在施事之后時，這種受事才是前置賓語。前置賓語大都出現在任指、對舉的句中。(前置賓語は有限である。文中に動作の仕手が現れ、かつ動作の受け手が仕手の直後に現れる場合にのみ、この受け手は前置賓語になり得る。前置賓語はほとんど「任意指示」の文と對比の文に現れる)

ここで言う「任意指示」の文とは“周遍性”を持つ文のことであり、上例〔14〕〔15〕のような文を指す。對比の文とは〔12〕〔13〕のような文を指す。ここでは、「動作の受け手が仕手の直後に現れる場合にのみ」という条件が付いてはいるが、「仕手」「受け手」という、動詞との意味関係から「主語」と賓語を決定しているのである。本稿で扱っているのは〔15〕のような文だけであるが、〔15〕の“〔一个〕字”を前置賓語と考えることの

不適當さについては2. 1で述べた。また、〔14〕は次のような多義性を持つ。

〔14〕' 彼は誰のことも知らない。

〔14〕" 彼のことは誰も知らない。

つまり、〔14〕の“誰”はもともと“〔不〕認識”の賓語（受け手）である場合もあるし、「主格の語」（仕手）である場合もある。この“誰”を前置賓語とすることはやはり不適當である¹⁰。

刘等は続けて次のように述べ、例文〔16〕〔17〕を挙げる。

如果受事出现在施事之前，那么整个句子就是主谓谓语句，受事成为全句说明、描写的对象——主语。（もし動作の受け手が仕手の前に現れた場合には、文全体が主述述語文になり、受け手は文全体の説明や描写の対象、即ち主語になる）

〔16〕 谁他都不认识。（誰も彼は知らない）

〔17〕 这次听写，一个字他都没写错。（今回のディクテーションで、ひとつの字も彼は書き間違えなかった）

〔14〕〔15〕の“誰”“一个字”が刘等の言うように「任意指示」、即ち不特定な語であると同様、〔16〕〔17〕におけるそれらも不特定な語である。一体、不特定な語が説明や描写の対象となり得るのであろうか。2. 2でも述べたように、〔14〕—〔17〕はすべて“他”について述べた（即ち説明や描写を加えた）文であり、「主語」（主題の語）は“他”である。

刘等は「主語」と述語について次のように述べている¹¹。

通常，一个句子总可以划分为两个部分，即主语部分和谓语部分；主语部分是陈述的对象，谓语部分是对主语的陈述。（普通，1つの文は2つの部分，即ち主語の部分と述語の部分に分けられる。主語の部分は陳述の対象であり，述語の部分は主語に対する陳述である）

ここで言う「陳述」は「説明や描写」と同義であろう。刘等はここでは陳述の対象、即ち「主題（話題）の語」を「主語」とする立場に立っている。

一方, [16] [17] の“谁”“一个字”を「主語」とするのは, この立場に反している。不特定の語に陳述を加えることは不可能だからである。これら“谁”“一个字”が「主題(話題)の語」ではないという指摘は次に取り上げる陸俭明1986にも見える。

2. 4. 陆俭明1986

陆俭明1986では次の3類の文をすべて“周遍性主语句”⁴⁴と名付けている。

- [18] 什么人都可以进去看看。(どんな人でも入って行って見てよい)
- [19] 一个人也不休息。(ひとりの人も休まない)
- [20] 家家都用上了煤气炉。(どの家もガスストーブを使うようになった)

上例の“什么人”“一个人”“家家”はすべて「主格の語」であるが, 陆は次のようにもともと賓語であった語を含む文も“周遍性主语句”として上と同じ3類に分けている。

- [21] 什么也看不见啦。(何も見えなくなった)
- [22] 一句话也不讲。(ひと言も話さない)
- [23] 样样都得自己干。(何もかも自分でやらなければならない)

これらの文の文頭にあって“周遍性”を持つ語を一律に「主語」ととらえ, “周遍性主语句”という文型を設定し, さらにそれを文法形式の違いから上のような3類に分類した点で陆1986は注目される。

陆は中国語の「主語」を「話題」(主題)と考える赵元任1968や朱德熙1982を挙げながら, 自らは「主語」の定義についての明言を避けているが, 「主語」と「話題」について次のように述べている。

就汉语而言, 主语不一定就是话题, 话题也不一定就是主语。…周遍性主语句, 其主语也不能看作话题。(中国語では, 主語は必ずしも話題ではないし, 話題も必ずしも主語ではない。…“周遍性主语句”の主語も話題と見なすことはできない)

陸は、上例〔18〕—〔23〕中の“周遍性”を持つ語を、「話題」ではないが「主語」ととらえるべきだと言っているのであるが、どうしてこれらの語が「主語」と言えるのかについての具体的な言及がないのは残念である。

“周遍性”を持つ語が「主語」になり得るといふ指摘は馬真1988にもある⁶⁴。馬は“受事主語”（受け手主語）について、

主語一定是有定的，即主語所指的事物或者是说话双方已知的，或者含有周遍意义。（これらの主語は「有定」である。即ち主語の指す事物が話し手と聞き手の双方にとって既知のものであるか、あるいは“周遍性”を含んでいる）

と述べて、次のような例文を挙げている。

〔24〕 书买来了。（本は買って来た）

〔25〕 信发了。（手紙は出した）

〔26〕 一个字也不认识。（ひとつの字も知らない）

〔27〕 什么都知道。（何でも知っている）

〔24〕〔25〕の“书”“信”は「有定」、即ち既知で特定な語である。この“书”“信”は“那本书”（あの本）“那封信”（あの手紙）のように、話し手と聞き手の間で了解済みのもの（あるいは話し手が了解済みと思い込んでいるもの）でなければならない。〔24〕〔25〕はそういう前提がなければ成立しない。次の文は成立しない。

〔24〕’ *一本书买来了。

〔25〕’ *一封信发了。

〔24〕〔25〕の“书”“信”は「主題（話題）の語」である。それに対して〔26〕〔27〕の“一个字”“什么”は未知で不特定な語である。陸1986も言うようにこれらは「主題（話題）の語」ではない。馬1988がどうしてこれらを「有定」とするのか、筆者には納得できない。

〔26〕〔27〕は、未知で不特定な語“一个字”“什么”が文頭に置かれているにもかかわらず、安定した文として成立している。この2つの文は〔24〕〔25〕とは違い、何の前提がなくても成立するのである。これらの

文は次のような文になって初めて「主題の語」が現れる。

〔26〕' 他一个字也不认识。(彼はひとつの字も知らない)

〔27〕' 他什么都知道。(彼は何でも知っている)

〔26〕'〔27〕'は「主題の語」「他」について述べた文である。以下では「主題の語」だけを「主語」と呼ぶことにする⁹⁹。〔26〕'〔27〕'は次のように分析される。(〔26〕'だけを例示する)

他 一个字也不认识。

主語	述語
----	----

上の分析は2. 2で見た「主述述語文」説の第1段階の分析と同じである。しかし、述語中の“一个字”“什么”は「主語」(＝「主題の語」)ではない。〔26〕'〔27〕'の述語部分だけからなる〔26〕〔27〕は「主語」のない文、つまり全体が述語からなる文である。

3. 「“……也”+否定表現」

以上、従来のとらえ方を検討しながら「“……也”+否定表現」の“……”を提前賓語とも「主語」とも考えないことについて述べてきた。以下では、“……”をどういう文法成分と考えるかという点と、「“……也”+否定表現」という表現に見られる文法的性質について考察していく。

3. 1. “……”について

「“……也”+否定表現」の“……”には、主格の語起源のもののほか、賓語起源のもの、準賓語起源のものがある。順に例を挙げる。

〔28〕 一个人也不去。(ひとりの人も行かない)

〔29〕 一个字也不认识。(ひとつの字も知らない)

〔30〕 一次也没去过。(1度も行ったことがない)

2. 4で「“……也”+否定表現」は全体が述語からなると述べたが、

「…すらも」という意味の介詞“连”⁹⁹の付加はそのことの根拠の1つになる。“连”を付加した下例は上の〔28〕—〔30〕とほぼ同じ意味である⁹⁹。

〔28〕’ 连一个人也不去。(〔28〕に同じ)

〔29〕’ 连一个字也不认识。(〔29〕に同じ)

〔30〕’ 连一次也没去过。(〔30〕に同じ)

“连一个人”などの介詞構造は、介詞の後に続く語がもともとどんな語であったかということとは関係なく、状語（連用修飾語）として扱われる。状語となることが介詞構造の主要な働きの1つである。これは介詞すべてについて言える⁹⁹。例えば、介詞“把”は賓語を動詞の前に提前する働きを持つが、提前後、介詞構造“把…”は状語となる。また、介詞“由”は動作の仕手であることを明確にする働きを持つが、“由”の形成する介詞構造は状語である。

〔31〕 我把这本书看完了。(私はこの本を読み終えた)

〔32〕 这个问题由我解决。(この問題は私が解決する)

上例の“把这本书”“由我”は状語である。同様に、〔28〕’—〔30〕’の“连一个人”“连一个字”“连一次”も状語である。従って〔28〕’—〔30〕’とほぼ同義の〔28〕—〔30〕の“一个人”“一个字”“一次”も状語として扱うべきではないだろうか。

ここで、意味がほぼ同じだという理由で、“连”の現れていない〔28〕—〔30〕を、“连”の付加した〔28〕’—〔30〕’と同様に扱ってよいかという問題が発生する。しかし、中国語では、本来あってもよいはずの介詞が文中に現れないことがよくある。

〔33〕 他〔到〕哪儿去了？(彼はどこへ行きましたか)

〔34〕 你是〔从〕哪儿来的？(あなたはどこから来たのですか)

〔35〕 这是〔在〕哪儿买的？(これはどこで買ったのですか)

上例では、場所を指す語“哪儿”と動詞“去”“来”“买”の意味関係に支えられて、介詞“到”“从”“在”は現れなくてもよい。“到哪儿”“从哪儿”“在哪儿”はもちろん状語であるが、介詞の現れていない“哪儿”も状語と

して扱うべきであろう。

「一…也」+否定表現はこれ自体が「極端さ」を表す文であるから、「…すらも」という「極端さ」の意味を表す介詞“连”は現れなくてもよいのである。“一…”は“连一…”と全くと言っていいほど同じ意味で、文中での働きにも違いがあるとは思われない。

3. 2. “一…”の「主語」飛び越え

〔36〕 一句话 他也不说。(ひと言も彼は話さない)

〔37〕 一口水 他也没喝。(ひと口のの水も彼は飲んでいない)

上の例では“一句话”“一口水”が「主語」“他”を飛び越えて文頭に立っている。これらの“一…”を「主語」とする文法書もあるが、その不適当さについては既に述べた⁴⁴⁾。では、何故このような「主語」飛び越え現象が起こるのであろうか。

〔36〕〔37〕の文頭には「たとえ…でも」という意味の接続詞“即使”を置くことができる⁴⁵⁾。

〔36〕’ 即使一句话 他也不说。(たとえひと言でも彼は話さない)

〔37〕’ 即使一口水 他也没喝。(たとえひと口のの水でも彼は飲んでいない)

“即使…也”は例えば次のように、複文によく用いられる1種の呼応表現である。

〔38〕 即使下雨，我也去。(たとえ雨が降っても、私は行く)

複文とは2つ、あるいは2つ以上の単文がある論理関係に基づいて1つに組合わかった文をいう。そして複文では“因为…所以”(…なので、だから)や“不管…都”(…にかかわらず、すべて)のように接続詞と接続詞、または接続詞と副詞の呼応が起こることが多い。

上例〔36〕’〔37〕’の“一句话”“一口水”の部分は文ではない。従って〔36〕’〔37〕’は完全な複文とは言えない。しかし、複文の1種と考えるこ

とができる。“一句话”“一口水”の前に動詞“是”を加えて次のような完全な複文にすることが可能だからである。

〔36〕 即使是一句话他也不说。(〔36〕'に同じ)

〔37〕 即使是一口水他也没喝。(〔37〕'に同じ)

このように〔36〕〔37〕の文頭に“即使〔是〕”を置くことができ、また置いても意味にそれほど大きな差異が生じないことから考えると、〔36〕〔37〕は既に複文的性質を持っていると考えられる。

実は「主語」の現れていない「“……也”+否定表現」の文頭にも“即使〔是〕”を置くことができる。

〔39〕 一句话也不说。(ひと言も話さない)

〔40〕 一口水也没喝。(ひと口の水も飲んでいない)

〔39〕' 即使〔是〕一句话也不说。(たとえひと言でも話さない)

〔40〕' 即使〔是〕一口水也没喝。(たとえひと口の水でも飲んでいない)

〔39〕'〔40〕'は複文である。従って〔39〕〔40〕も既に複文的性質を持っていると考えられる。

〔36〕〔37〕において“……”が「主語」を飛び越えて文頭に置き得るのは、「“……也”+否定表現」自体が複文的性質を持っているからであろう。

3. 3. “一点儿”について

次例では“……”の部分に“一点儿”を用いている。

〔41〕 一点儿也不知道。(少しも知らない)

〔42〕 一点儿都不了解。(少しも分かっていない)

《現代汉语虚词例释》は上例の“一点儿”について、

也写作“一点”，修饰“不、没”，表示完全否定。（“一点”とも書く。“不、没”を修飾し、完全な否定を表す）

と説明し、“一点儿”の品詞を副詞であるとしている⁸⁾。つまり“一点儿”を

状語と考えているのである。筆者は、同書が“一点儿”を状語とする点については賛成するが、“一点儿”の品詞は通説に従って数量詞と考える。

また、同書は、

〔43〕 一点意见也没有。(少しの意見もない)

の“一点”については、“表示微量的数量詞”(少しの量を表す数量詞)と述べ、〔41〕〔42〕と区別している。〔41〕〔42〕と〔43〕の間には構文的な違いがあるのだろうか。

〔41〕〔42〕〔43〕の文頭には“连”を置くことができる。

〔44〕 连一点儿也不知道。(〔41〕に同じ)

〔45〕 连一点儿都不了解。(〔42〕に同じ)

〔46〕 连一点意见也没有。(〔43〕に同じ)

また、これらの文頭には“即使〔是〕”を置くこともできる²⁸。

〔44〕’ 即使〔是〕一点儿也不知道。(たとえ少しでも知らない)

〔45〕’ 即使〔是〕一点儿都不了解。(たとえ少しでも分かっていない)

〔46〕’ 即使〔是〕一点意见也没有。(たとえ少しの意見でもない)

さらに、“一点儿”“一点意见”は「主語」飛び越えが可能である。

〔44〕” 一点儿我也不知道。(少しも私は知らない)

〔45〕” 一点儿我都不了解。(少しも私は分かっていない)

〔46〕” 一点意见我也没有。(少しの意見も私はない)

以上のように、〔41〕〔42〕と〔43〕の間には構文的な相違は見あたらない。これらはすべて「一……也」+否定表現」と考えればよい。また、〔41〕〔42〕の“一点儿”を副詞とする必要もなく、通説に従って「少しの量を表す数量詞」と考えればよい。

3. 4. “也”と“都”

「一……也」+否定表現」の“也”は“都”に置き換えることができる。また、置き換えたことによって、構造に変化は生じないし、意味的にも大き

な違いはない⁴⁴⁾。

〔47〕 一句话也不说。(ひと言も話さない)

〔48〕 一句话都不说。(〔47〕に同じ)

朱德熙1982では、

〔49〕 什么都有。(何でもある)

〔50〕 谁也不知道。(誰も知らない)

などの“周遍性”を表す文の“也”と“都”について、

肯定句里“都”比“也”占优势，否定句里“也”比“都”占优势。

(肯定文では“都”が“也”より優勢で、否定文では“也”が“都”より優勢である)

と述べている⁴⁵⁾。朱が扱っているのは疑問詞を使う文の場合で、肯定文と否定文の両方が存在する。

「“……也”+否定表現」は言うまでもなく否定文に限られるが、この場合も朱の言うように、“也”を使う方が優勢を占めるのだろうか。

また、“也”も“都”も用いない表現も存在する。

〔51〕 一句话不说。(〔47〕に同じ)

この点については、既に陆俭明1986に次のような指摘がある。

B类周遍性主语句……谓语句一般也都伴有“都/也”，但不像A类那样严格。当充任谓语的是“不/没+单个儿谓词”时，“都/也”可以不出现。(B類の“周遍性主语句”も述語の部分に一般に“都/也”を伴うが、しかしA類ほど厳格ではない。述語が「不/没」+1語の動詞や形容詞の場合には、“都/也”は現れなくてもよい)

B類とは「“……也”+否定表現」を表し、A類とは〔49〕〔50〕のように疑問詞を用いるものを指す。

ある中国人インフォーマントは本稿で扱っている文について、自分ならば“也”よりも“都”を使う場合の方が多いと指摘した。“也”と“都”の使用については個人差があるのかもしれない。そこで、複数の作者からなる資

料を使って，“也”を使う場合，“都”を使う場合，いずれも使わない場合の用例数を調べてみた。調査に用いた資料は《作家、评论家、编辑家推荐1988年全国短篇小说佳作集》（上海文艺出版社1989）と《相声选粹》（中国广播电视出版社1990）の2冊の本文である。調査の結果は次の通りである。表中の「ゼロ」は“也”も“都”も使わない場合，数字は用例数を示す。

〔調査1〕

也	都	ゼロ
2 1	1 4	2 3

これを〔49〕〔50〕のように疑問詞を使う場合と比較してみる。

〔調査2〕

	也	都	ゼロ
肯定文	9	3 7	0
否定文	3 8	1 0	0

調査2の結果からは朱1982の正しさが分かる。

調査1の結果はどうであろうか。「一…也」+否定表現」については“都”を使うものより，“也”を使うものの方が多かったが，“也”の方が優勢を占めるとは言い難い。“都”もよく使うようである。また，“也”も“都”も使わないものが23例で数として最も多かった。この23例はすべて陸1986の“不/没+单个儿谓词”という条件を満たしていた。

4. まとめ

以上，中国語の「一…也」+否定表現」について見てきた。本稿の最も大きな主張は，この種の文の“一…”を状語と見なすという点である。実はこれらの“一…”を状語と見なす論考もないわけではない。龚千炎1983は次のように述べる。

这种固定格式大多是主谓结构，也有的是偏正结构，它们在句中

常做谓语。(この種の固定形式はほとんどが主述構造であるが、
偏正構造もある。これらは文中でよく述語となる)

龚は、次の〔52〕〔53〕は「主語+述語」構造が述語になった文、即ちいわゆる「主述述語文」で、〔54〕〔55〕は「状語+中心語」構造が述語になった文(“状动谓语句”)と考えている。

〔52〕 我一步路也不想走。(私は1歩の道も歩きたくない)

〔53〕 他一句话不说。(彼はひと言も話さない)

〔54〕 奇迹一次也没有发生过呵!(奇跡は1度も起こったことがないのだ!)

〔55〕 那两个卫兵一步也不离开我。(あの2人の衛兵は1歩も私から離れようとしなない)

しかし、龚のこの分類に筆者は疑問を感じる。例えば、〔52〕から“路”を取り除いた次の文は〔55〕と同じ構造である。

〔52〕' 我一步也不想走。(私は1歩も歩きたくない)

また、〔54〕については下の例を見ていただきたい。

〔54〕' 一次奇迹也没有发生过。(1度の奇跡も起こったことがない)

〔54〕" 一次也没有发生过。(1度も起こったことがない)

〔54〕'から“奇迹”を取り除けば〔54〕"になる。〔54〕'と〔54〕"の間には構文上の大きな違いがあるのだろうか。〔54〕は〔54〕'の“奇迹”が「主題化」されて「主語」になった文と考えればよい。

上例の“一步路”“一句话”“一次”“一步”をすべて状語と扱うのが筆者の考え方である。

龚1983で注目すべきことは、「“一…也”+否定表現」が「文中でよく述語となる」としている点である。

〔56〕 你怎么一点儿也不知道?(あなたは どうして少しも知らないのですか?)

〔57〕 你真正的一次也没去过吗?(あなたは本当に1度も行ったことがないのですか?)

〔58〕 他是不是一句话也不说？（彼はひと言も話さないのですか？）

〔56〕—〔58〕の「……也」+否定表現」はすべて“怎么”“真的”“是不是”とともに述語となっている。「……也」+否定表現」は全体が述語であり，“……”の部分は未知で不特定なものだから「主題化」され得ないのである。

〔59〕 一句话他也不说。（ひと言も彼は話さない）

において“一句话”が「主語」「他」を飛び越えているのは，“一句话”が「主題化」されたのではなく、「……也」+否定表現」が複文的の性質を持っているがゆえの「主語」飛び越えである。このことについては3. 2で述べた。

また、本稿では扱わなかった次のような文の“谁”や“什么”も状語として扱うべきではないかと、今のところ筆者は考えている。

〔60〕 谁都知道。（誰でも知っている）

〔61〕 什么也不知道。（何も知らない）

この問題については、中国語の「主語」、動作の仕手、受け手等について再度検討してから、考察を進めたいと思う。

注

- (1) 〔1〕で“也”ではなく“都”を用いたのは、この種の文では肯定形の場合には“也”よりも“都”がよく用いられ、否定形の場合には“都”よりも“也”がよく用いられるという傾向があるからである。朱徳熙1982, 93頁。また3. 4参照。
- (2) *を施した例文は不成立であることを示す。
- (3) “周遍性”は「普遍性」と訳したらよいのであろうか。相原茂1987では「総称性」と訳している。
- (4) 382—383頁。“周遍性”は原文では“遍指的意思”となっているが、同様の意味である。
- (5) ここでは“一个人”“一本书”と“〔不〕去”“没意思”の本来の関係について考えているので、格関係に基づいて「主格の語」と言い、「主語」という語は用いない。筆者は「主格の語」が必ずしも「主語」であるとは考えない。「主語」について

は2. 4も参照。

- (6) ここでも当然「主語」の定義が問題となろうが、ここではとりあえず通説に従う。
- (7) 95頁。
- (8) 北京大学出版社《現代汉语》186頁。
- (9) 文頭に出た“一句话”をどう考えるかについては3. 2参照。
- (10) 270頁。
- (11) 序でも述べたが、[14]は[15]と同じ類型に属する文とされる。このような文については本稿での考察を踏まえた上で、稿を改めて検討するつもりである。また、[12][13]のような対比の文についても本稿では扱わない。
- (12) 263頁。
- (13) 相原茂1987では「総称性主語をもつ文」と訳している。
- (14) 51—52頁。
- (15) 小川郁夫1984参照。
- (16) “连”は一般には介詞とされているが、介詞ではないとする説も多い。例えば、江天1980は語勢助詞、洪心衡1981は介詞、接続詞、副詞の兼類、廖斯吉1984は接続詞、徐枢1985は助詞、吕香云1985は構造助詞、费嘉1988は副詞、沈开木1988は語気詞、周小兵1990は副詞としている。本稿ではこれらについて詳しくは検討せず、通説に従って介詞とする。ただ、“连[-]个告状的方都没有”（訴えていく所すらない）における“-”の省略は介詞には認められるが、助詞、接続詞、副詞、語気詞には認められないことを付け加えておく。
- (17) 陆俭明、马真1985, 34頁に、「“一……也”+否定表現」の文頭には、“连”や“即使”を置くことができる場合があるという指摘がある。“即使”の付加については3. 2参照。
- (18) 马真1988, 18頁に、“介词结构在句子里主要做状语, …所有的介词结构都能做状语”(介詞構造は文中で主に状語となる, …すべての介詞構造は状語となることができる)とある。
- (19) 2. 2及び2. 3参照。
- (20) 注(7)参照。なお、3. 1で挙げた“连”については、規範的な文法では“他连一句话也不说”(彼はひと言も話さない)という語順をとるが、ある中国人インフォーマントは、口語ならば“连一句话他也不说”も可能だと指摘した。本稿では“连”の品詞を介詞としたが、接続詞的な性質を持っていることも否定できないようである。注(8)も参照。
- (21) 463頁。
- (22) これらの例文は単独では不自然だと思われるかもしれないが、“关于那件事情, 即使[是]一点儿也不知道”(その事については、たとえ少しでも知らない)のような文にすれば不自然ではなくなる。

- ㉓ 陆俭明、马真1985, 35—36頁では、この種の文においては“也”を用いた場合も、“都”を用いた場合も基本的な意味はほぼ同じたとしながらも、視点“说话角度”の違いから両者の差異について論じている。
- ㉔ 93頁。

引用文献

- 胡裕树1981《现代汉语》，上海教育出版社。
- 徐枢1985《宾语和补语》，黑龙江人民出版社。
- 刘月华、潘文娉、故铎1983《实用现代汉语语法》，外语教学与研究出版社。
- 陆俭明1986《周遍性主语句及其他》，《中国语文》1986, 3。
- 赵元任1968“A Grammar of Spoken Chinese”, University of California Press.
- 朱德熙1982《语法讲义》，商务印书馆。
- 马真1988《简明实用汉语语法》，北京大学出版社。
- 《现代汉语虚词例释》，北京大学中文系1955, 1957级语言班编1982, 商务印书馆。
- 龚千炎1983《论几种表示强调的固定格式》，《语法研究和探索1》，北京大学出版社。
- 相原茂1987「海外の言語学」, 『言語』1987, 3, 大修館書店。
- 中国逻辑与语言函授大学教材《现代汉语》，现代汉语教研室编1983, 北京大学出版社。
- 小川郁夫1984「中国語の『主語』をめぐる問題」, 『名古屋大学中国語学文学論集第4輯』。
- 江天1980《现代汉语语法通解》，辽宁人民出版社。
- 洪心衡1981《现代汉语语法概要》，广东人民出版社。
- 廖斯吉1984《试谈关联词语“连……也/都……”的功用》，《西北师院学报（社会版）》，1984, 1。
- 吕香云1985《现代汉语语法学方法》，书目文献出版社。
- 费嘉1988《浅谈“连……也/都”结构中“连”字的词性》，《语文学学习》1988, 4。
- 沈开木1988《“表示强调”的“连”字所涉及的形式同内容的矛盾》，《语法研究和探索4》，北京大学出版社。
- 周小兵1990《汉语“连”字句》，《中国语文》1990, 4。
- 陆俭明、马真1985《现代汉语虚词散论》，北京大学出版社。